120
43
53

續膝栗毛

三十

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53

ガラス使用

続膝栗毛二編 下

120
43
53

東京圖書館

和書門
小說類
二六函
一二架
九一號
四三冊

120
53

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53

ガラス使用

木曾街衛 續膝栗毛六編 下巻

東都 十返舍一九著

明治十年交換

TOKIO LIBRARY 東京書籍館 明治五年 文部省創立 FOUNDED BY MOMBUSHO 1872

行山家のもの寂しく松風の音耳につきて夜も
祝しらせてあくる紙待ち稲田を立出て山道を
たどりく。漸三落合の歌にて出たりける。棒鼻の
菓屋女ども。往来を呼たる「お母さんなされ」
お煮染の生来たてもござりませんなア。おそいり
なさまく「ごんなさる。安くいきませどろ

国立国会図書館 タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53
ガラス使用

繋ていぢやろせませ「イヤ〳〵驚ぬのり飽て。
気なりし〳〵ト行るるに接ぐるに気ハあとよりつゞてきたり「そんなことは云ひ
せずとと。繋てくれさろしまいませ。まんざがいに
となりもまけないでこしどもハなア憂ことでや。
要てくれさろしまい。米が一升百せるに。うちの
かゝあが此中から。私気を病でこしなア肝が
ゆへるから。酒食でいうぞとに。のに旦那どうでく
「いくらでのせる「ハテ「がいま稱らせてくるなからぞ。

ゆへよふにくれさろしまい「そんなから稱ぬさん。
そろくいき稱。おいらテどふしろ足がまこし
なまけて来るから繋ていきやせう ト此ホにてかどのさうぞんができて。
きたハハかどに手のると。稱ぬさきへ也く。やがてかどハ十きよりくとうげよさしかる。此ところにてきろ事がうまくといふをうる家ある「サアく
お買なさろてどざりませ。當ホの名方 狐膏菓。
此道中おあしの痛。今痰切祇稱ぶと其是もの
ホきらいぞ。ひとはけにてなをる事うけあひ。
和ゆへ吸がうまくのまひよせるるハ。金稱の重紹を

さしいよせ。惚れ女中がこをもぴこくと吸よせるゆ
奇妙希代。おこしなりこまお買なりさまゝ〳〵イヤ
といふへおりしまへ。かごの亂ちとまつて下せ。
モシその吸がうせくへ。女郎買にいつて。ふらまて
よりけり種へ女官をも。さしいよせ女郎さまゝ稱へさまゝ
く。たゞがそこに仕ぬうがござりまさと。そんな
とれにへ。膏茶を紙へのぞさぎに。小判へのぞて。
その女官へ出付てゆりなさい。だきに吸よせ

まさと一おきやがまそんなことであろうとおつこ
女をも吸よせるとへ出たらぐい
そまへうちまこかうせくにくれ
味の菓屋にへ。栗の強飯名物あり
洗波のむけし女へ見えるごも
栗のこまめし夜の名物
かくて此和の菓屋に駕紙こそるに。折ふし
夜に居合せる男。是も駕かれ仲間にて

十曲峠孤膏茶

旅人を
化さしてせん

かう
やく
の
きり
祝の
さんる
妙
なし

さらま
金丸

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53
ガラス使用

「ヒヤア 落合の砂きあんだいたゆいなア。こなたのきこうたかんき 「ムヽ
たらしか。にしこんだうへよくねげこなア 「そのねげ
こでしひつけこ。にしふたほどがある。いつそいゆら
ざる 「よからざく。コレだんだあさる。涌をちくと。
寄へ何があらざ ちやをのぞく 「良く麿とこらしびだろう
ござる 「それでもよからざ。サア 砂きあんだいいぞや
ござい 「ヲイ 旦那ちくとゆつてゆきさい 上女ぞて涌をたゞめうけ。
さいつあさへいこがひまだまゝしかけてのむ あどこまのちあれ
ゆうりしも舌もゆつくゆ あどこまあいどれとまりて 「コレにしの

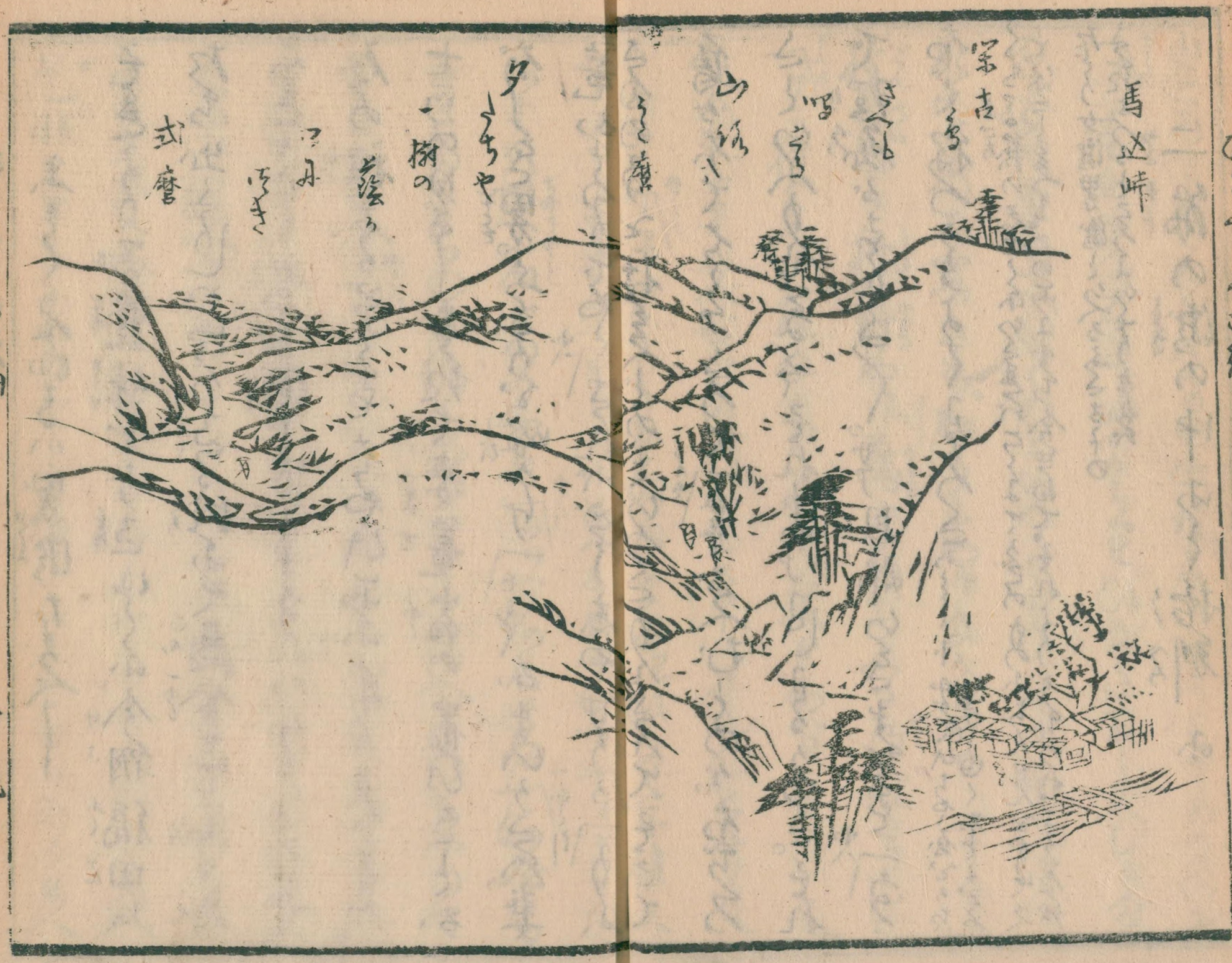
ここへ。いかざくとおりつてあつことこでや 「なんでく
「おかのこんじやアまいが。にしこんだう。中宿新田の
羊ざへむさるのところで。がいよのへこゝあつてごらん
ごくをゆりからいこげな。コレ羊ざへむさるもこゝろ
安くするものごんて。うつちゆつておかざとこゝア
なからざ。マアごふいふこんでや 「ソリヤア からいふ
こんで。にしもしらざとこゝアなからざ。あつこの内へ
むかざ入 ゆきよりぞれていきあつこ時。がいよざうさ
池玄

せるのゝ忍いが。こしにとひやうとてろもなのものを
くれ甘ぎとと出いこれ。ふと紙ゝ廉にしこんでや。
こしそこできるなのハ。モシ悍なぐらぶちよなる
こんぐが。此亭主どのへちくとおりふからぎ。こし
加るかねれせるが。是まで蝿とりもちよヲ。くんこ
ことハおぎんない。ふとにはりちよヲくれせて口中
をひつけりひつぱらせて。こまらせぎとしろてう。
はだおうどもめが。ぎまでことおりふ。落合の
勘ちさるぎア。あてこともないと。それから入ふ出い
て。らんごくをやりからかるが。こし紙ぎやアおら
まい。マアどこにあらぎことろ。卒のなるへ牛房や
菓蘋ハ忍いが。はくらいに丸くしこ。蝿とりもちよヲ
入まて出いこりんぎんて。こしきるなのハ「イヤ」その
ちなしをきいこが。ソリヤアにしがおぞからぎとハテ
蝿とりもちじやア なからぎと。麩でおらぎとこア
忍まてある。ひなこ焼麩ハ忍つてゐぎが。生麩と

いへハしらまい。その中なる數と云屋さるが。おなごらちそうに出いる所。ひなるこが無理じやアなからざろ。それぢろうぢやアない。ひなるこ芋ざへむさるのこと所。芋ざへむどのとこいるこげな。あのふとも中宿の正法寺秋田じやア。役人でや。足辭でいへじやアなのいが。ひなるこがその中宿の正法寺秋田の。芋ざへむさるのこと所。芋ざへむさるといへべよからざふ。そまを。正法寺秋田の芋ざへむどのといろこもんざんて。そこでもろてからに。正法寺秋田の芋ざへむさるが「コレく」あれも芋ざへむどのざんて。芋ざへむどのといろこと芋ざへむどのが。あぜ芋ざへむどのといろこと。おてぢらア法ろころこアなからぎ「インニヤサ」その芋ざへむどのといろこアからのるよ。そこでもろて芋ざへむさるが「コレ」きさるこちへ。何のこうら稱へことをいろまでいろてゐるのこ。ん母く駕を母ら稱へか「イニ子」そこ

どころじやア おざんなるい。此理屈がどうもすめなるいに
「アニ きめなるいことアなからぎて。ひなこ芋ざへむさる
のこと紙。芋ざへむどのといつこもんざんて。おてはつ
たてさつ志ゆつこも。むりじやア なからぎて ハナテ
撞気来が稼前やア。鳥がおぢくる尾ぎ
「アニ 撞気がたゆまきやア。鳥がおぢくることも
あにも。芋ざへむどのが。おてたらア こつこアな
からぎて「アニ コトからなるいふとこア。ひなこが撞気
さるのるを。撞気どのといつこもんざんて。そこで
鳥がおてたらア こつて「芋ざへむどのが。おぢくる
こといふもんざな。そそれじやア 且こるくつこ。それ
で理屈がきめこく。サア 且那いきませぎて「ゆへ
おど稼つからよくこうつこ ハヽヽト ゆがて此ちや屈をかたいぞし也くおどよ。おや
くもつる幾の元也くにいこまべてこうこのものにしてかぎの
して。絲ちつ気へも。この所にまち合せねて。それよりうちつれ。さらに尾紙
たどり女瀧男瀧と分へるふこまでの
これおつるところにいこりなれば

二 筋の瀧の中にて 捨別 に



国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53
ガラス使用

ふとくゑゆるハ男潔なるべし
そまより爲籠帥を寸ゑゆくに今朝福田代
たち出さりしハ。同ゆるゆる頃にて落合まで出る所
ゑまがこく。彼是隙どりしるすなれバ。おりひの外
所の程たりどらぎと。たやけ所に来りうんまバ。
七ツの日ざしまだて妻籠宿の宿ひきとお
がしき男。ふさりを呼かけ「モシく」おまいがこゝへ。妻
籠おとゐりでや「ハ」さんべどうしやおまいか「もふ
おとゐりでよからぎとこし所へお出まいか「イヤコウ
ちらハ定宿がありまを「ツリヤ」何屋でや「ハ」何屋でも
きさゐこちの世話にやアなら程へ。うつちゆつて
おきなせへ「イヤ」已寵にあたりおつて来さりん
ごんてコし所へおつまゆさぎに「ハ」とおうも程へ人
だやア程へか。宿ハそつちのもの。銭ハこつちのもの
ごから。どこへでも勝手にゆくハ。きさゐのところへ
是非とまらにやアなら程へといふまけもあるゆへ

「イヤモシ、ぞめく商売じやんで、家業ねがなけらにやア。
しかし、おとなしくやうなことに「エヽ、そうだ男じや。き
さまの女房ハいやなこといふ。「やアぞアぞアとみつうん
でや。「ぞよいよるでかアべらぼうめ。きさまの知
が、どんな惚れかたした内で、化の出る肉せう。
廻しきのよあくさり蕣孔と出した肉せう。首縊の
あつた肉せう。そまも志様へりのを「イヤこのふとい。
ヨしいろ蕣孔と出して「コヽらねが蕣孔を出
せば、おまへがまるめのろ屎られめが「ハヽヽ 屎紙
これまでふうかなうらぞ。にしおられそうるである
ころ「そまてるてぞ。おらくアア毎日まゐる。「コヽま
ゑんあアがれ。ひおくここぞうぞうれぞア「うつちあつて
おとうやアがまく。おまへが屎でおまへがたまへるふうねう
が甘うふやアなうら猪へ。又甘うふなるというて
ゑんやアがれ。よころはしアえりとぞさそそ「アニこの
たおうやろうめがトつるきかくるに

おきあがりて。いつさんよりけ出ばけ

「ハくしとんだせつもあまがあるものぞ

往来の客はさておれ者ひきの

あしをもとめぎにぐるおりしち

かくて日も西の山の端にかたふらんとするに。

ふたりは急ぎ坂乃をくだるに。そしのころ十七八より廿三四までのをんな

同志三人づまゆてふたりのさきへたちてせくを思ひはて「ナントこんなせ。女の屋をふつて

ゆくうしろつきは。どふもこるく孫へものぞぜ。コウ

婦さんたち。おめへがたア国はどこぞへ 同者の中にてこしまのをんな

「アイこしどもは奥召うら出来中に一ツリヤ夕ちまい

ふから伊勢来ぞな。さへて三人づまら。男も法いて

来たろう「イシ女まだあとからひたり。女ぶい女人

同志にはん出来中にのぞアり「かたへそうか。

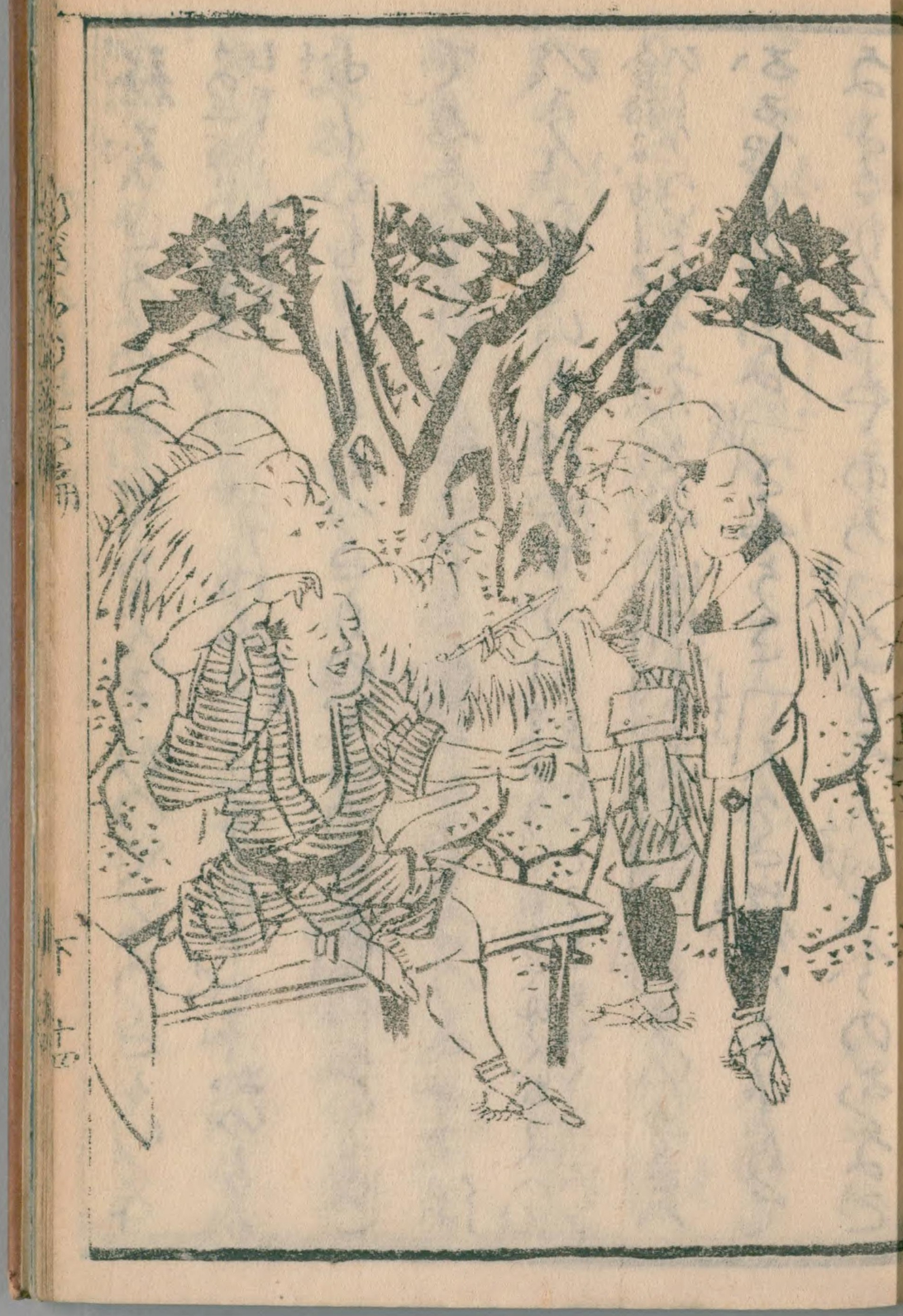
美い娘に。は山坂をあるうせるとはむぞうしい。のに

婦はたち。足がいたむなら。おいらがおぶつてや

ろうろト そぞくよれば。そしの也うねむをもとどもはきもをつふしたうれをして。ちかつとうきへつくとまいのとしうさの女「こし

どもはハア。そうでもおぞんないが。よつれるうの乃中で。

ひ花ハがいふうぐ〇花ハ中くこ。それにハア。只ども
よんこいくらめやて。アレアんさ。さろ。ちんだア。ひいて。
き甘ちなんこんぐアなれど。路銭がさけないりん
でおぐるから。あんちうさぐいこともないで。めこい
こんぐアりし「そのろハあんにいぢしいりのぐ。ろハ
どこまでいくつりぐえ。あんなら今銭ハ。おいら
といろ志よにとまら孫へか「アニハア。ぐもハ。にし
さちとどうしに。宿さアとりやさてくアならない
りし「まぜく」座銭とまりにしやまハそれにハア。
同志のごぐさまくちやア。焼ひやさとよんこ路銭
のゥ清ないやて。ろふもあとの宿で。鍋尻鰐のゥ
ふとろひさろ。世ろひやてうちくんくまんまぐア
りし。めごいこんぐとおりつてくまさんでうト
まうぐこぐこていふよ。そのまりふうぐく。いかさまにもと
さらやうまて。泣ひらこれをふびんにおひ。銭二百文ぐらり名出て
「おこ二
かりへそうぐ。女をうりで銭がなくちやア。さぞん
だそうろう。なのにしろ。くふりのさくハぐ出。猫のゥ



国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53

ガラス使用

猛義ごろふ。是でなんぞかつてくろこがいゝト
かの二百文を母まだむせうよいうごきて 女 コリヤ ハア 内みようごアり 「ホハ」 おいらが
おしおもしくがあつこものを。いつそ義つぢいえ遠
で。志ろうされて来こうら。氣がなくなつこ。サア 孫
ひさん。ちといそぎやせう ト 女つれをかけぬけてゆく。むかふへ上方ものとみえ。めいく引はしの
合羽よ。ぜしたりのつこを。こいがけにしる三人づれ。ひとりのをとこがふりかりて。紙をしらふこ志かけ 「ハ」 おまいかくこへ
おゑどじやな 「紙」 さゆうさ 「よかこ」 大かこ 旅へ ちじめて
なさるりんじやあろ 「ホハ」 なぜ入 「ハテ」 今のおなご

どもがいひおつこる。わんまふらけてじやさかい。
アリヤ 室國同者おさごまりじやこいの。あなのに
こざことむさいなりして。紙のない 敷志をうへ。復
广の灰やなどに。元はかれぬ爲じやこいのよふ
おりふてもこんなさま。室國からおなごづれで。出て
来おつこもの。それだけの影がなふて。何のまあ
出おるりんかいの。それじやさかい。おなのにいふ成。おん
まかとおりふて。紙女くんしくこ。志くいあをなころちや

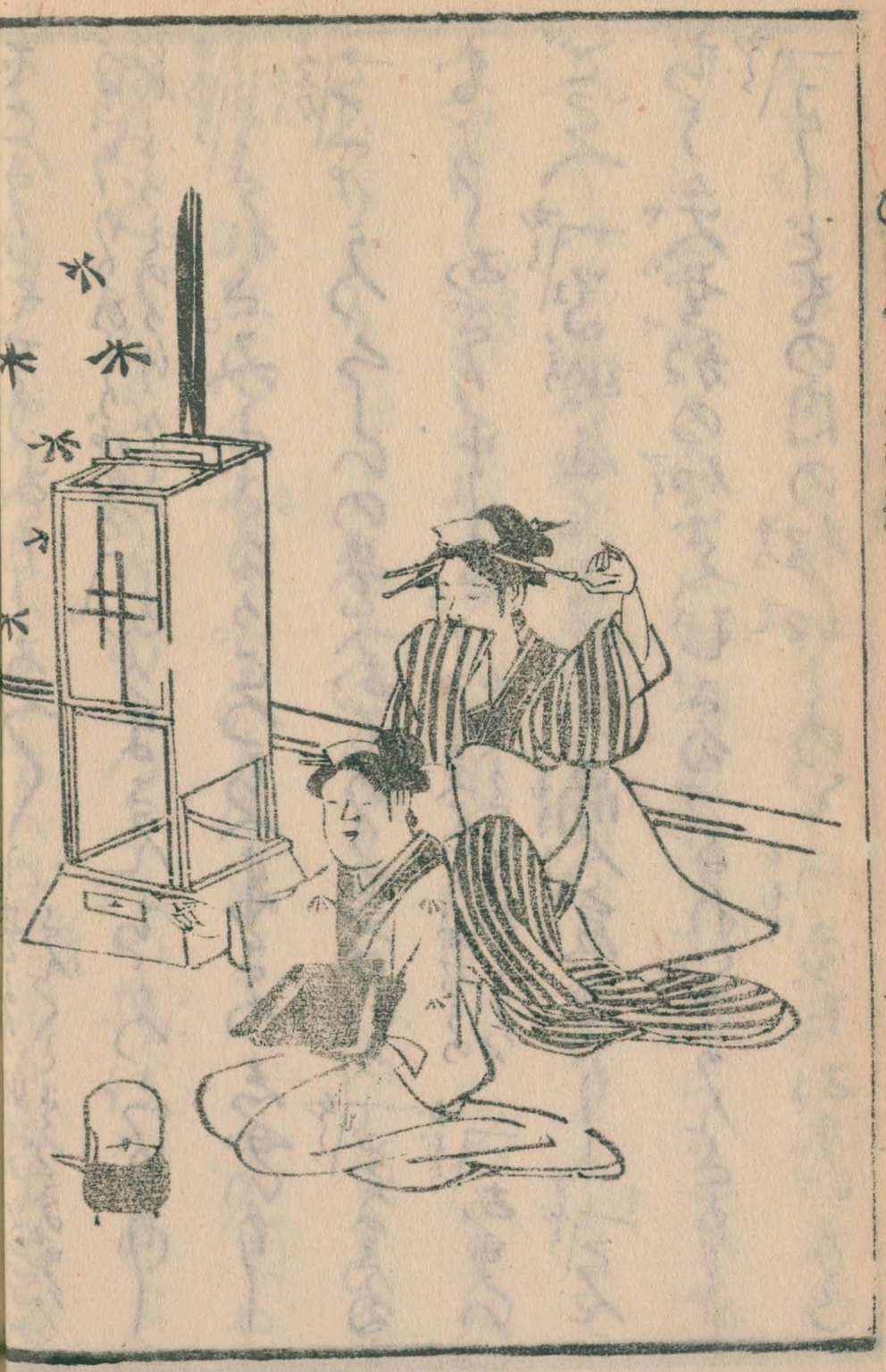
ないかいな　ゆハ「イヤもしふ。ぜんてハけんハ。平生弓稜のうへに
女とこんアもやア程のるす。いろぢの程へ人ごからのるさ
孫「アてそうかへ。なるほどそれじやア業務なことに
しこいめへましい。そろけへして来よふ　ゆハ「ハテ申さ物
ど。いくじや程へかへ　上方「おこ旅といふものハ油断のなら
ぬもんじやもいな。[illegible]ども年中とないに旅だから
あるをあるさかい誰がごないなるすいふて来さてく。
ソリヤもしふ。ぐるんもいなく。のふハ長　ハ「そりやもいな。
さかくおまいがこれそないなとろてハ渡戸の所にぐる
されさんをじやあろ。そこ背ハどこにおとなりしやや
ゆハ「もしさをの者へさまりやせう。上方「そんなりや。[illegible]
どもといろしこよにごまつてこんなされ。ソリヤもしふ
もさかん。旅者の骨頂じやもいな　ト此をなしのうち妻
けバあらハのたさごやより女ども出てひろたる　女「おとまりなされ。お湯もまいて
おりまさ　上方「己ひろんさな。きりもんがさけるもいな。
こちや黒服屋へゆくのじや　ゆハ「モシこの黒服屋と

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53　ガラス使用

いろいろ宿う孫 上方 「アアいてこんなされ。忍ゝいろんろし
りのぶあるまいな 一 此内もや。ろろまこやのかどさなまいされば。上方りの
さなまたちて。ぞやくとそいる。ちるなどされい
なる宿なれば。[illegible]小八もらくまとまゝんと。おなじくそいまだ。
としのころ三十だりの。きいこふう。しき女おう。ちしまいでゝ 「これい
おそかうおざりまして 上方 「おまいの顔見よとおりまして。
忍らいそばまたしつて来こまいな 女おう 「ヲホヽヽあざ
けこゝべいおろしまる。サアおくへおこづりやしませぞと
小八 「十二 おこづりまる。まざゆくりんもしき孫へうちに ハヽヽ
トミまくおくのろへ[illegible]ざつそくやにもいり。[illegible]
[illegible]
おなでおざりまして 「いまだなるこア。さそいきさまま
か 下 ぞな。こいろいあやまる 上方 「イヤおゑどさん。コリヤ
でけこ。忍らいく。時にあほさんぞらに忍い酒が
あるいな 「女 「むうふにでこなるいゑいさけがおさりまし
上方 なんがかな。モシおゑどさんいどふじまいな 「よふ
どざりやせう 上方 「そしこうひとり一合あて。酒も合
に者。さんなとかうてかんせ 下女 「バイく 出酒のおあいま
へ入ませぞる。忍いのべいおこざつて来おりませぞよ

「いろさるよろろ。おゑどさん隨合なされ」「ちゝのへ
いろゝでこざりゆさと」「あ百く」「おめへがこが喰ぶに。
ゑんてもおらしめへのふ小八志かこが稱へ」「ヲツト
それできまりドや。サアく女中。今の酒あへこおゑま
あ合ゑのゑまさと。ちゆろとく」「ハイくちろえま
しこ」トろてゆこと。志ぐらして内の女おう。まれぎんもと。つけまろ
びのはこのをさらにいれて。かこまにてうこさろきゑかちゆ
「サアくふとろあがりませ。女郎さんがこゑいんま
おこづりにゆりましこが。ろふいてのゑで。こんな
お客さるがおざりまさとで。あ人さるにやふとりこう
まいで。だあぎと出の女郎さるふとり。へまてゐぎんで
おざりませう。「十二だあぎと出とゐへ」「比丘尼の
ころちやまいな」「ハアそんなら。女郎がよろこりあへ
てひとりおら稱へから。比丘尼ゑよしたいのごな
こいろおりしろざぬき」「そしこうそまと。竈どり
かい。ツヒよろろ。そゆうはかんで来ゆんせ」「アニサまんぎ。
いろとれるがおざりませぎに。コリや動うなさま。

おまいさちがおそべ里なさろてうらぶ代物ふろ
けして。女郎さるがさを出しませぎをふらゆえで
ふとりづく。ふろかへておあそびなさるがよからざと
なアかし「なるねどく。ふらがりにしておやまが
さぐりどりか。コリヤ思らいく。そこで訪じやまいな。
誰も比丘尼ハ気がないもんじやさかいなんじや
あろと。ぼおうにとりあろうさ人の揚代ハあと
写へて出してやりつこにしよかいな「いかさまそこら
でござりやせうおりしろへくト是より泥れとなりて
どんくとさぶきのまわる
うちゃめしわりひとり次のろ
のかしらうえのかげから「おうまさん。ちよろくりりし
女ぶう「ざれざ。みふさるか。ころちへまさろ思いかり
上方「イヤア。うろくしの是へおえいりでないか「ざまさる
もよくおざりました。ーざしきへえいり女ぶうの
そぶへうさひざたてくすなる「おまい
ごこへ「るま迎屋でよろいの商人房ざアかし「こん
ぢう矢野郎の仁ざへむさるアざれをよんざかし
女ぶう「コしどもの内の松ねどのを「あぜ。おまいうら



国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』　請求記号 120-53

ガラス使用

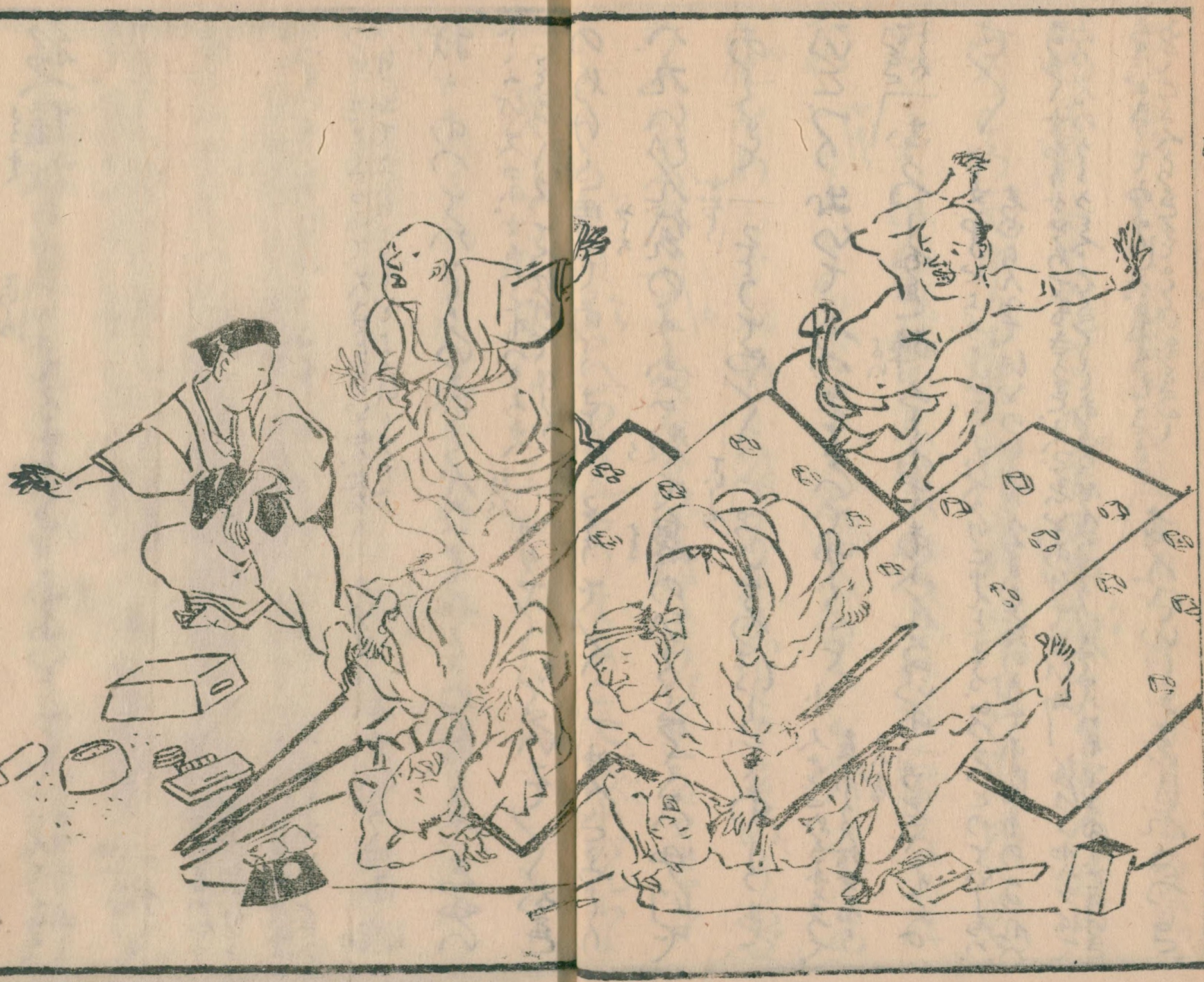
まいりし「コレあんなぢんだいのおとゐ」。やアどこに
「かぞうさるへ。ふさしく来るなる「ホンニ きんのしの
姦をよころこが。コレしざとこいよこづらい。コんてくを
さろしやいまし トふところよりぶとをとりむし「男の文体
ざんてコレもよめましない「おきやくさるよんで
きうせてくをさろしやいまし「ドレくなんじや。
何に何せ中へいこうへよまぎとしれくるゆ。しか
をべけるは誠下されは花氣の葉。又くはこし

下さるべくは さて又は鑄絆きへしゆはこの外国た
うりはゆゑよくくは洗ひ下さるべくは「ヲホミ おらう
やアどこよアニそんなるゆがかいてあらざとに「噂と續
ものゝ。コレけるりじや。あとへ絹の本綿六尺半はこし
下さるべくは我にふんどしけやうにきれはは気も
持せきへしは睾丸の油にて垢染はるども出洗ひ
なされはて佛檀の布巾にでもなさるべくは。藪
糸たちたろさる加茂とかいてある「ヤレハア噂べい

よまつ志ゆるりし 「ハテおまいも競ひぶかい。此ゆるり
かいてあるに ハテよめこまいな。此加茂といふは。コリヤ
おまいの客で有る人じやな。此人が親もとへ出る手紙と。
おまいのとこへおこさと。みと。いちどもにかいこりんじや
さらい封じる時るちがへて。親父の所へ出る手紙をおまい
のとこへふうじておこしこのじやハ 「やアごよう 「コリヤ
おめへの色をとこざる 「おとゐしい。こりしあるつぎちを
かいこりし 「マアひとろ春なせへ 「こりし泡はいけましたない。
おかまさゐあしこどもに 「ヨウくく加茂さゐく
ごよゆうごよウトクさかけ 「こりしやこちへ来こお女
うとおりふさ 「おまへさゐがこのわいんまに来ませぎ。
りふおそべてなされまし トたや泡もてうじきりあけてしまい。
そこらとりかこづけ。下女もかつきもよのぎふとんをもちてこい。
とことをとると。そりふしろそよ大せいの女のこゑきをゆれば 「モシく
女郎さゐがこがお出こそうなト あんどうをふきけし。まつくらがりにさると。こなくあるを
とひかげて 「サアくごふごく 「そこへあげませぎ コレく
雑 ゆらひとりさゐへ出てじやもつとひつこんで。

なのらだんせ。ソリヤ忍ひぞく　ト　まちかけてゐるところへ。三人の女郎。つぎのあらう。
おしのれると。こゝなくいちどきまつ三合。ひとりの女郎をふたりしてひつたるゆら。男同士ひきあふゆら。大さうらぎしさすり。ゆらりくひとりに
ひとりづゝ。ひきつれて稱ける。三人はおくの事。強ひらに八ハ。つぎのあへ稱る。
いづれもくらゆとなれば。ほうらねども。強ひらがあいうこ。何とゆらだらぎ
らさく。そろくとさぐりまはしてゐれば。さてとそびくになり。強ひらそろと
忍ひしが。よくくおりつに。あげせん出さぶとのあそびなれば。これもそく
ようむきなりと。どてろまよろこび。手らしさるが。志ちらくまるしかるての
みさは大ごへあげて。なにかはらきちらまゆ忍。よくくきけれ。この家の
ていしゆとゐえ。今外より　ていしゆ　あんごあてこともさのいはしごこに
ふりさるゆうまとゆて
よつたらつこ。たれことこゝなのみおふまにしゝと
そ顔　えんや　深つまぎらぶへでく　女ぼう　ゆうんさくでもなの。
ごこへいつて　醉　くらつておざろこ　ていしゆ　アニごこへもいかないが
こなりの気たと。せどやのおんだいやらうめが。ヤレハア
ふとろのめと。坂口の泥田やでもうにゆりからいて。
醉　つこくへさいなアハイ　女ぼう　おとゐしいこんでや。毎日
お宿　ふさに出て。ふとりもおとぎろて来ないで。
酒べいのんでや　ていしゆ　アニ　ゆもゑどのものふたりづれが。
竈　にあらつて。おとづらうとゆひおろうら。既無る
と。こきやアがるのんざんて。おま業後とにゆらいて。

ぞこまゝいがめて母らざとおりろ。ましがいに。
どやされさりんざんて。兵たや熊十が。そろほら
ぶろころして母らざとおろうけこが。でとあしのさん母い
母らで。けんぬげて志まいおろこ。けちらそなこん
でや「ましうちへとまら志母ろこ。こ人ハ上がこの
乱であらざとが。あとひくりハ。ゑどてそのようぞ。
のふおふ里「ア」ゑどりのでひくりづまう。ソリヤア
ふとりハ亀のまゝいぢざんぢりまゝなとで。横小びんちよ
のぬけこ男であらざと「そうでく」「まんざふとり
ハ丸いひん袋のよふな顔で鼻のひらくくゝい母りで
あらざと「そうでやく」「そろほらであらざと
ひとづり出いてふつたゝいて母らざと ト 人をごめざにはつて。
ひきとめ「おうつし母を確ろうてあぶんなのに「ウンニヤ
せく ト 女ぼうをよりたまさしかへかけこまんとまる。いろこいとのといしあれ。
志也らんゆで。酒をのむとろんらまざ。丸のもてあましりのなれば
なるく女ぼうがとめてもきうざと。大ごゑをあげてもびあし。強ひらゆハが孫て
みろ君のかろうえ。だらくしあるる。せんてくよりきて八ハめをきあし。このいさ
らさをきてみたりしが。是もむきものの
ゆてとるくらまをとらゆおきて「なんざいけそかじんさつき



国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53

ガラス使用

うら。だまつて吹てゐまべ。おいらかるゆうとおもうも
猶猿松めざ「アニさるまつこア あにとこく トこんでんいるまつらしゆゑ
おて。ひきまわしあるひゆうぶつきあつると。
此ひゆうぶゆうとも。孫次ら小八の上へさをれる「あいこくく 小八「何と
志やアがる トつゑつけへ。こまつてもまけぎ。とろふゑあひ。おくの君のからうゑをふゑたづし。こ人の孫てゐるトスふゑ合てこえけると
此こ人も女后もこもに。こまつくおれ出。何かへ志らずとうろゑ。さるこれ。まつ
につまづきとろげるゆう。こもこおんをふゑらぐ。ゆう。いづれもおびしきひ
ろげ。九ちぐらにて。大さるこぐさを母。女なう
かけ出て女后どもをよびこして「コレくおまいがこに。喧
我があつてゐるのに。こんなもゆくねげさろ志ゆい
トよびさろに。女后どもいうろえ
こまくうろてくにげてゆく 孫次「コリヤくいさいぞくおま

が睾丸をとこゑりつていくだまざく 上方「ヤアおまいい
ういな。コしやあいうこのおやまの。きんこまくとおゑこ
上方ものつまの男「コしやさろきにうら。積がおとろて。だゆり
なうろこが。此さるこぐさで。その積がどこへゆらいて志
まふこ。そこらにやいぬうんてくぐんせ。あいこく。
イヤどこへゆらいこと思ふこが。まこ来おろこ。あいこ
く。あうりて来てゆんせ。たゆりくト 大さるこぐさをゆるに女ゆうあんどうを
さげて来り。ちゆ せとき八がつゑあゐてゐるとこまくうちなり。ゆうくのるまにて川コけ。上方ものがいさいをきて。ぐんくあいさつ とりたがに

うろたへるやら取あげて
くるしまぎれにけるる

女郎「コリヤアどうなさるもおゆるしなさ
てまへうちがあの番のむすめやらうめで。おまへのご
くにおかざりまして。わしもあけましよ。らんまのふ
伝授とおけまするト ふいと手を引つれて、ろうかへゆけば。こゝろよく
あとにのこりし あつけにとられし
弥次「コリヤア おりひざけ弥次。大きにおせわとかへつたへ
ゝが。演然のやぶどもを。なくはしるをはすく弥次
そもくの おまての女郎衆
餞別 さそのちがうまもまし

よこ「ホン二 おまへがくこのやさうで あるめとやうすを
あつめて。おとめの一トこへ。そうしげに よめあつまりく
弥次「そのうへふまざ。おきのどくなるが あのやまと。
まろちがつくわへるなさるの。出して下さうと
ゐまのさ 北八「まゝよく 弥次「ハテ比丘尼おさりあそくこの
のはとおへ。おとめの買人ろ。出まと はめり じやア弥くら
北八「コリヤア あつまてきと 弥次「そまぜにらう。おまえが比丘尼
おかゝうろくろく 北八「うそ嘘をつく。そのまゝくるら弥へ。

比丘尼へあいつが出入来て。弥次「てめへしあつた揚代を
かたろうとふて、男ざ。ばゞらんあたまが出入来ては。
ちがひへ弥次へ北八「イヤあいつが出ざく 「コレくあるまと
さんざこまらんせ。コリや変トやないな。ごうのところへ
ひつこんでおかさまも。比丘尼も。あつもなく ゑんおう方へ
斎(とき)によばれて出くさらい。夜のうちに深(ひそ)く来つと
ねしあつて よこわのへつもの男 ふえもちをそえて「イヤ己しもひとつドやとなな。
その脇は。まのうちに十念(じふねん)もつてぬいすつてとなへ
に一夜でも抱なさるべきへ。他生の縁じや。今度ゑん気だ
あつて。石の地蔵を建立するほどふなんおまと寄
進ふついてくれといひあつてさるい。こゝもびくふぶや
弥次「イヤここの噂どろうあいつぞうり角ふ。ばおうへ
弥次へえぐるふ 北八「エ、きこえたし。コリヤひくつ比丘尼を
交(まぜ)よみとりつて。あんながらびくふなもして。宿のかゝあ
めがあいつをあとまふりけやアがつたのでござふまとて
くつ世ふふきやアがつて 弥次「コリヤ上がるの。あゝあへめへふまも

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53
ガラス使用

120
43
53

まゝ猪人。旅のるすなるゆゑ猪人と。きのふ志
平楽をいろ〳〵けが。ぞふしこものぞ「コリヤけるいの
コるい ト たがひにあらそひ合。こゝとのさいちう。女おうう猪をりち出。なるゆゑ。ゑなく出きとまりて。そのことをいひ出せど。女おうは
いろううにとり合ぎ。こゝひとりびろうにを出しこりとだうりにて。猪のあけぬ
うち。くらがりにて。かんらは。ゑるぎにふ。とりにげしこることまれば。猪のせうと
もなく。うれこれもろ迄くいろこにかゞたてしつかぎ。ぜひなく。こなくそのあげ代を出し。そこごとをたらひ。もうくそこくにして。代中ごを立出るとて
みんまで比丘尼は出せど天。あらう
毛もない鼎の女房にくらし
かくてみんは。代妻籠を出て見せがら。ゆゑ鼎の者にはぐらう

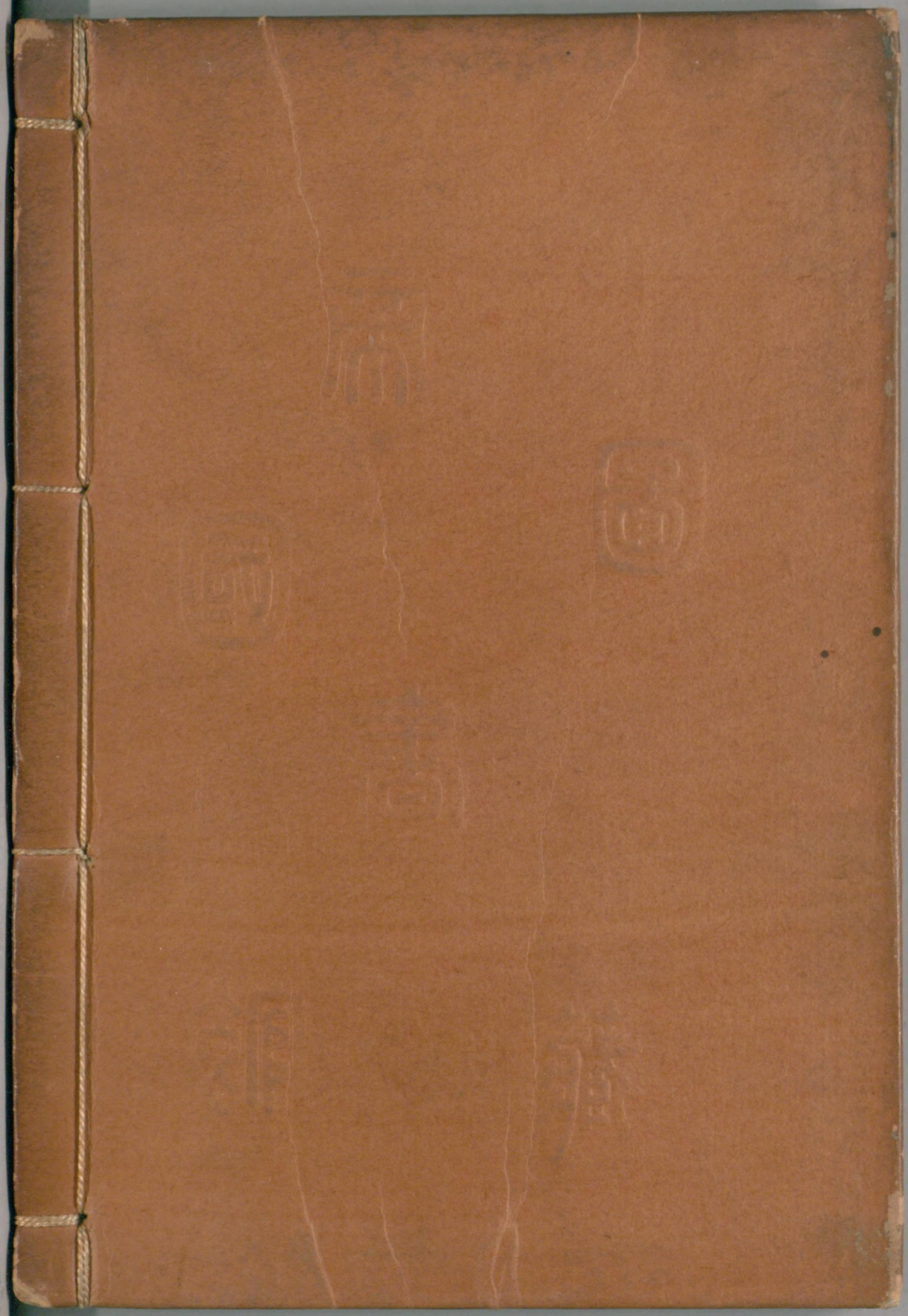
さ迄ことを。はほ合ひゆけば。おとうり助々のるをひさ
まる男。代はほをきてつけ「かゝおまいがこれよん鼎道正寺ト
の比丘尼を賞えるまゝ。あの寺にはびくにが女人鼎いも
ありあつて。夏一斜にて。はとめに出ありまさん「ハアそ
いつをみ百文といひ。まいまい鼎のかあめぞ。今ろうあとへ
わどろて。家養皆とふこ迄てやろふろト
まごめられ。せんさなくこどくぐ。さどりゆきなる

曾道 續膝栗毛六編下巻 終

120
43
53

国立国会図書館　　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』　請求記号 120-53

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』　請求記号 120-53

ガラス使用